

# ヘーゲル『大論理学』第1版質論研究

佐野 之人

## 序

小論はヘーゲル『大論理学』第1版(1812/13)質論の論理構造を別扱せんと試みるものである。論理展開に曖昧さを残さぬこと、および本質的な論点のみ取り出すことを指針とした。この相反する二つの要求に十分にこたえることは困難を極めるが、『大論理学』を自分の血肉と化したいというかねてよりの私の願いをここで果たそうと思うのである。小論はそうした試みの最初の部分を成すはずである。

## 元初

始まり(Anfang)が始まりである以上、何ものをも前提してはならず、したがっていかなるものにも媒介されてはならない。またそれは規定されたものであってはならない。なぜとって規定は区別を前提し、区別という以上或るものと他のものの相互媒介が前提されるからである。したがって始まりは無-媒介、無-規定でなければならない。しかしこの表現もなお区別を含んでいる。そこでこの区別をさらに徹底して排除するとくだ有る、それだけ(reines Sein)が残ることになる。

## 第1編 規定性(質)

### 第1章 有

#### 有

しかし有というのもひとつの規定である。そこでさらに徹底してこの規定を排除すると、有は有という規定をも失って無となる。

#### 無

しかしそれを無としたとたん、それは無という規定を持つことになるが、それはまさしく有と同一の規定である。

#### 成

かくして真理は、有は無へと移行してしまっており、無は有へと移行してしまっているということである。ここにおいて有と無は絶対的に区別されながら、同時に各々は直接にその反対のものの中で消失している。この運動が成である。成とはかかる仕方での有と無の統一である。

#### 成の契機

成において有と無は、区別されているという点において有り、反対のものへの移行、反対のものとの同一という点において無い。すなわち有と無は成の契機である。その際かかる無から有への移行が生成であり、有から無への移行が消滅である。

#### 成の止揚

消滅と生成の区別は有と無の区別に基づいている。しかし有と無が直ちに自分の反対へ消失してしまうのであるから、消滅も直ちに生成であり、生成も直ちに消滅であることになる。こうして一般に成とは区別の消滅する運動であるが、同時に成は有と無の区別に基づいている。こうした自己矛盾のゆえに、成という消失する運動そのものが崩壊・消失し、成は静止した単一性、直接性となっていく。このような有と無の直接的(無媒介)な統一、換言すれば有るものとしての統一が定有である。

この弁証法において本質的なことは、成を有と無の統一とすることで、有と無の同一が固執され、両者の区別が捨象されるということである。それ

によって有は無へと、無は有へと消失するばかりで、かくして生じた無が無として、有が有として、したがって両者の区別が区別として定立されることがない。こうして成は総じて消失する運動となるのである。そもそも成は静止的に固定する働きがなければ成立しない。こうした働きを欠いた成は自らを燃やし尽くすのみである。しかしその結果は無ではない。成は自らを止揚するのである。止揚とはもとの規定の無として、もとの規定を含む。こうして成は自らを燃やし尽くして成果を残す。それは有と無の消失的な統一の否定として、有と無の静止的統一であり、これが定有なのである。

## 第2章 定有

### A 定有そのもの

#### 定有

定有は有と無の直接的な統一として有であるが、非有を伴った有、すなわち規定された有である。しかし定有は有と無の統一であるから、このように定有が有の規定のうちにあるのは不完全である。こうして定有は自らに即して自らを非定有として定立する。しかし非定有は無ではなく、それ自身定有であるから、定有の無としての定有、すなわち他有である。こうして定有は他有へと移行する。

#### 他有

しかし他有が他有であるという仕方で直接的になると、それは他有ではない。それゆえ他有は自分自身の他者であり、定有の再興である。定有は他有に成りきることのうちでかえって自己を維持しているのである。このように他有へと関係している定有が向他有である。

#### 向他有と即自有

しかしこのように定有を純粹に向他有としてのみとらえるならば、定有は定有であるといっても他者のうちにあり、他有へと移行するのみで、定有は自己に固有の有をもたないことになる。しかしながら定有はその他有においても自己を維持しているのであるから、定有は他者への関係において自己への関係でもあり、こうした定有における自己関係としての有が即自有である。

#### 実在性

こうして即自有と向他有とが定有の契機ないし側面として区別されるが、こうした区別は定有の外からなされた外的反省による区別、反省規定である。したがって定有が即自有と向他有の統一であるとされるとき、定有はもはや最初の直接性という形式のうちにあるのではなく、反省された定有となっている。これが実在性である。ところで即自と他は後に規定と性状、内面性と外面性、最終的には概念と現実性として、したがってまた両者の統一としての実在性も、最終的には理念として豊かな内実を得ていくことになる。

#### 或るもの

ところが実在性における両契機は、外的反省によってこのような相互に無関心な両側面に切り離されているだけであって、両側面の各々はむしろ他の側面を自らのうちに含み、相互に移行しあうものであるということが明らかになることによって、定有そのものは両側面を止揚する統一となる。こうして定有は自己内反省する。かくして向他有の止揚による即自有、他有の否定を通じての自己関係が成立し、定有は自己内有となる。かかるものとして定有は定有するもの、或るものとなる。

#### 定有そのものの総括

少し振り返っておこう。定有は他有に成りきることのうちでかえって定有を維持するものであった。このうち定有が他有に成りきるという側面が向他有、定有が定有を維持するという側面が即自有である。したがって上の文は、定有は向他有に成りきることのうちで即自有である、と換言できる。他となり相対性、流転性の只中にありながら同時に自己のうちにあるということである。しかしそれが「即自有である」、とすることで向他有が止揚されることになる。こうして他有（の肯定）における自在、ではなく、他有の否定による自己関係が固執されることになる。しかしここでも固執は徹底である。自己関係が徹底され、自己＝自己のイコールが純化されると、直接性、有が復活する。すなわち他と成りきることのうちで自となること、否定の否定を通じての直接性の復活である。かくして或るものが生成するのである。しかしこのように自己関係が固執・徹底されるということは、同時に定有が一定のあり方をとって、す

なわち規定性を獲得して、定有するものとして具体化し、そうして他有に煩わされ、今後またしても変化という相対性、流転性の只中に入り込むということである。

## B 規定性

### 限界

今述べたように、或るものは他有の非有を通じての自己関係である。そのように自己関係に固執したとたん、非有とされるべき他者がたち現れる。しかし或るものが或るものである、すなわち自己内有であるためには、或るもののうちで他者が終わっていなければならない。そこで或るものは他有が終わること、したがってそれは或るもの自身の有が始まることであるが、そうした限界を自らにおいて持っていなければならない。或るものが限界を持つことによって、他者は或るものの外に存在し、或るものと他者は相互に無関心的な関係のうちにあることになる。この際、限界はさしあたり或るものからは区別され、なおかつそれは自分自身を限界づけるのではなく、他者を限界づけるものと考えられている。

しかし限界は他者ではない（他者の非有）、という仕方では他者を限界づけるばかりでなく、自分ではない（或るものの非有）、という仕方では自分を限界づけるものでもある。こうして限界は或るものがそこにおいてあり（＝他者がいない）、かつない（＝他者がある）ところの媒辞である。すなわち或るものと他者は自らの定有を、相手と限界の彼岸（というより相手と限界のこちら側）に持っているのである。

### 規定性

しかし両者がこのように限界の外にあるならば、両者はともに限界づけられていないことになり、お互いに区別ができない。それゆえ或るものは限界のなかにのみ有り、限界が自己内有をなしているのである。ところでこのように或るもの（自己内有）と同一になった限界が規定性である。

### 規定と性状

かくして或るものは規定性と同一である。したがって或るものがその規定性を失えば、或るものそれ自身も消滅する。

ところで規定性は自己内有と限界との統一であ

ることによって、規定性も二重の仕方で規定されることになる。すなわち一方では自己内還帰して自己内有となった限界として、他方では他者へと移行して、限界としてあるところの自己内有として。前者が即自的规定性としての規定、後者が向他有的规定性としての性状である。もう少し丁寧に述べるならば次のごとくとなる。先に限界において①或るものがあるときには他のものはなく、②他のものがあるときには或るものはないと言った。①の他者の非有を通じての自己内還帰、自己内有、自己関係が規定と呼ばれ、②の或るものの非有を通じての他者の有が、或るものに属してはいるものの、或るものの即自有には属さず、或るものの外的・表面的定有である限り、性状と呼ばれるのである。

### 質

規定性は最初は或るものとの直接的な統一にあるが、今や外的反省によって規定と性状の両契機へと区別される。このように反省された規定性が質であり、質とは両契機の統一である。

### 変化

ところが質の両契機が外的反省にとっての異なった側面に過ぎないことが明らかになることによって、規定性は両側面を止揚する統一となる。それは次のようにしてなされる。

或るもの（自己内有）は限界（或るものの非有＝他者の有）ないし規定性と同一であった。これも先述の、他と成りきるものうちで自己である、と別のことを言っているのではない。ただ同じことが以前よりも一段高い勢位のうちで論じられているのである。さて上述のように「同一」とすることで、またしても直接的な自己関係が固執＝徹底されて有が復活する。その際限界は〈他者の非有＝或るものの有〉として、或るものうちへと自己内還帰するのである。これが規定であり、或るものの即自有をなす。しかしこのような固執に対してただちに非有とされるべき他者が立ち上がってくる。とはいえ〈他者の有〉としての限界は或るものと同一とされているのであるから、そこで外的反省は、他者は或るものに属しながらもその即自有には属さぬ外的・偶然的定有、すなわち性状だと言い張る。こうして反省は規定と性状を区別して、或るものと他者の統一に抵抗

する。そうなる変化はさしあたり性状においてのみ起こり、規定そのものには関わらない、とされる。なぜとって性状においては他者の有（＝或るものの非有）が或るものに属しており、こうして或るものの有が同時に他者の有（或るものの非有）であることになって変化が成立するのに対し、規定においては他者が存在しないからである。

しかしこうした規定と性状の区別は外的反省のなした区別であり、両者は或るものそれ自体においては合一されていることが明らかになる。なぜとって或るものは本質的に、ということはその規定において性状を持つものであり、この性状はあるものに固有の外面性というよりは内面性だからである。こうして性状は規定そのものである。かくて或るものはその内面的な規定において同時に他者であるから、或るものそのものが変化することになるのである。ここにおいて質、すなわち反省された規定性は自己内反省して徹底的な変化へと向かうことになる。

### 当為と制限

しかし外的反省はこうした変化への移行になお抵抗しようとする。すなわち今度は「べし」という観点を持ち込んで、或るものはこれこれでない（或るものの非有）が、これこれである（或るものの有）べきだ、と主張するのである。その際、或るものがこれこれであるべきであるが、これこれでないという側面、すなわち「或るものの規定をなしているけれども、同時に或るものの非有として規定されている限界」が制限であり、或るものがこれこれでないが、これこれであるべきだという側面、すなわち「制限としての自己への関係における規定の即自有」が当為である。そうしてこのように「反省された規定性」が今度は否定と呼ばれる。

### 定有における反省規定の総括

話の途中であるが、ここで定有における反省規定をまとめておこう。まず定有が反省されて即自有と向他有となり、この二契機の統一が実在性であった。実在性は自己内反省して或るものになった。そうしてこの或るものが規定性と一つになった。次に規定性が反省されて規定と性状になり、この二契機の統一が質であった。質の統一を通じ

て或るものないし規定性は変化することになるが、この規定性がさらに反省されて、当為と制限となり、この二契機の統一が否定なのである。そうしてこの否定が自己内反省して有限者となるのである。ここでは実在性と否定が対立し、質が中間に立って両者を統一している。しかし否定は実在性の真理としてあらわになっているのである。

### 否定

かくして規定性は総じて否定である。第一の否定は規定性としての否定であり、第二の否定はその否定の否定として絶対否定である。規定性としての否定とは、スピノザがあらゆる規定は否定であるといった意味で、規定することは限定することであり、他有を他有とすること（＝自分でないとする）によって、或るものがある規定性を有することを意味する。すなわち規定性は否定すべき他有を根拠に持っており、その意味で規定性の本性を成しているのは非有（自分でない）ないし他有なのである。或るものは自分がこれこれである、とすることによってかえってこれこれでないということに煩わされる。外的反省はこうした規定性としての否定を、或るものと他のものとの区別ないしは或るものへの固執のゆえに、制限として感じ、またそのように捉えるのである。

第一の否定はこうして「非有（自分でない：筆者）として定立された規定性」であるが、第二の否定は「非有として定立された規定性の否定」であり、否定の否定、絶対否定として「他有を止揚することとして自己内還帰する単純性」である。自分が自分でない（他である）ことを否定して、自分が自分であることへ帰ることである。しかし外的反省はこうした絶対否定を、直接的な規定性への固執のゆえに、自分は（現に）自分ではないが、（本来）自分であるべきであるという仕方で当為にしてしまっているのである。

こうして外的反省は第一の否定と第二の否定を、自他の区別への固執、ひいては変化への抵抗から制限と当為というように並べてしまう。「しかし或るものは当為として自分の制限を超えているが、逆に或るものは当為としてのみ自分の制限を超えているに過ぎず」、それゆえ「汝なすべきが故になしうる」と同時に、「汝なすべきである、まさにその故になしえず」といわれうるように、

両者は不可分である。

## C (質的) 無限性 有限性と無限性

こうして制限と当為が外的反省にとっての両契機に過ぎないことによって、規定性そのものは両契機を止揚する統一となって自己内反省する。こうして或るものないし規定性は、有限者の本性ないし規定が無限であるという仕方での、有限性と無限性の統一となる。

### 有限性と無限性の概念

外的反省が或るものと他者の統一、したがってまた変化に抵抗して設けた「べし」による区別が解消することによって、またしても徹底した変化が現成していることになるが、この変化が反省を経た分、豊かに捉えられることになる。変化は或るもの(自分である)と他者(自分でない)の統一により引き起こされる。このうち自分が自分であることにおいて自分でないという側面が有限性であり、自分が自分でないことにおいて自分であるという側面が無限性である。両者は同一の事柄の両側面であるが、それは有限性が自らを否定することにおいて無限であるということである。いまや単なる変化が、有限性の自己止揚の運動として豊かに捉え直されているのである。

もう少し詳しく述べるならば次のようになる。或るものは制限されていることによって有限である。しかし制限は当為においてのみ制限である。それゆえ有限者は同時に制限を超えてもいる。すなわち自分の他有を否定して自己に関係してもいる。しかし今や「べし」によって「現に」と「本来」を区別し、両者を「も」によって並列させることはできないのであるから、制限と当為は有限者の自己止揚の運動として統一されることになる。ところで有限者の自己止揚によって成立する、他有の他有ないし否定の否定を通じての自己関係が無限性に他ならないのであるから、無限性が有限者の本性であり、規定だとされるのである。「有限者は自分でこうした自己止揚を行うのであり、有限者とはそれ自身無限であること、このことなのである。」

ちなみに有限者がそれ自身無限者である、あるいは無限になる、というヘーゲルの主張は甚だ評

判が悪い。しかしそれは多くの場合誤解に基づいていると思われる。ヘーゲルは有限者がそのまま無限者であるとか、無限者になるといっているのではなく、有限者が自らを否定する、それが自覚的になされるにせよ、無自覚になされるにせよ、自らを滅ぼすことにおいて無限者であるといっているのである。これを別のところでヘーゲルは「有限者の非有が絶対者の有である<sup>(1)</sup>」とも表現しているが、これは不遜な主張どころか、きわめて冷静で当然な主張だといえるだろう。

### 悟性の有限性と無限性(悪無限)

しかしながらこうした有限性と無限性の統一をまさに統一として捉えることにおいて、両者の同一性が固執・徹底され、またしても直接性としての有が復活することになる。〈自分が自分であることにおいて自分でない〉を否定して〈自分が自分でないことにおいて自分である〉に至った、その結果である〈自分が自分である〉に固執することによって、両者の統一はまたしても振り出しに戻ってしまうのである。かくしてここに現存しているのは「実在的な定有」としての有限者であり、その否定は第一の否定ないし直接的な否定としての「規定性としての否定」に過ぎない。

有限者がこのように規定・固定されることによって、有限者の規定としての無限者も規定され、両者は相互関係のうちに立つことになる。しかし無限者はこうした規定において、第二の否定から第一の否定へと引き下げられてしまっている。こうした無限者はそれ自身有限な無限者として、悪無限ないし悟性の無限者と呼ばれる。ここでは有限者が実在的な定有として固執されているのだから、かかる無限者は空虚なもの、規定を欠いた彼岸だということになる。

### 有限者と無限者の交互規定

こうして有限性=実在性、無限性=否定として両者は相互に外にあって互いに他者を突き放してはいるが、有限性と無限性はもとはといえば両者の統一から出てきたのであるから、両者の根底には内的な統一がある。とはいえそれは内的な統一に過ぎないから、無限者は有限者のもとに、有限者は無限者のもとにただ現れるだけのように見える。

有限者はその内的な本性によって無限者へと乗

り越えられる。しかしこの無限者は有限な無限者に過ぎないから、新たな限界ができて、そこに新たな有限者が出現するだけである。こうして無限に進んでいくのである。これが有限者と無限者の交互規定としての無限進行である。

無限進行は永遠に繰り返される当為であり、同じことが反復されるだけの退屈な交替に過ぎないが、そうなる根拠は無限性がそれ自身有限な悪無限でしかないからである。この無限者は彼岸という確固とした規定を持っており、それは到達されるべきでないといわれているから到達されえないのである。逆に言えば有限者は此岸として、無限者にとって他者という規定を持っているがゆえに無限者に高まることができないのである。

以上の論理展開を簡単に確認しておこう。〈自分が自分であることにおいて自分でない〉という有限性を否定して〈自分が自分である〉へ帰ることが無限性であった。しかしこの〈自分が自分である〉が捉えられることによって、直接性としての有ないし実在性が復活するが、それは直ちに他者とかかわり、これを否定しなければならないことを意味するから、〈自分が自分でない〉に転ずる。かくしてここに実在としての有限者が成立することになる。これは制限が外的反省のうちではなく、有限者そのものにおいて復活することを意味する。これに対し〈自分が自分である〉としての無限性は実在としての有限者の彼岸、すなわち決して到達することのできない到達目標としての当為となる。ここにおいて当為も無限者のうちに復活することになる。〈自分が自分である〉ことにおいて〈自分が自分でない〉こと、としての制限は、必然的に〈自分が自分である〉という当為に向けて乗り越えられねばならない。こうして再び有限者は〈自分が自分である〉という当為へと到達するが、到達することが直ちに〈自分でない〉という制限へと転ずることとなり、こうした有限性と無限性の交替が無限に続くのである。これが上述の無限進行である。

### 無限性の自己内還帰

こうした有限者と無限者の無制限な交互規定は、悟性が〈自分が自分である〉ことの直接性への固執＝徹底により生じていることは明らかであるが、「しかし実際には (In der Tat aber)」、

同時にこうした徹底によって内的な本性に過ぎなかった有限者と無限者の統一が外に現れ出てきてしまっているのである。すなわち有限者は自らを乗り越えざるを得ないし、無限者も有限者を乗り越えることとしてのみ存在していることが明らかになっている。〈自分でない〉は〈自分である〉へと向かわざるを得ないし、〈自分である〉は〈自分でない〉を乗り越えることとしてしか成立しないのである。こうして無限者とは有限者の自己止揚の運動に他ならないのである。すなわち〈自分でない〉が自分を止揚して〈自分である〉へと帰ること、否定の否定（他有の他有、他有の否定）としての自己内還帰（自己関係、自己相等性）、これが真無限であり、このことが悟性によっても自覚されるようになったのである。

## 第3章 向自有

### A 向自有そのもの

#### 向自有

ところがかかる真無限が真無限であるとして捉えられると、またしても直接性としての有の復活である。それは他有の否定を通じての自己関係 ( $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots$  を通じての  $A=A$ ) としての向自有である。それは自己において規定された有、その意味で絶対的に規定された有である。

真無限のプロセスを記号化すると次のごとくとなろう。(なお  $A \rightarrow B$  は  $A$  が  $B$  の向他有になることを表し、 $A=B$  は  $A$  が  $B$  に成りきっていることを表す。) 有限者は  $A=A$  とすることでかえって  $B, C, \dots$  を否定しなければならない、という仕方では他者に関わり、( $A \rightarrow B, A \rightarrow C, \dots$ ) 自らを失って ( $A \neq A$ ) 他となる。(  $A=B, A=C, \dots$  ) 有限者はこうした自らの有り方を止揚せざるを得ず、それによって他有の止揚による自己関係が成立することになる。(  $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots : A=A$  )

向自有はこうした真無限のプロセス ( $A=A : A \rightarrow B, A \rightarrow C, \dots \Rightarrow A \neq A : A=B, A=C, \dots \Rightarrow B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots : A=A$ ) の  $\Rightarrow$  で結ばれた三つの項のうち、結果としての第3項を捉え、これに固執・徹底して有になっているのである。

#### 向自有の両契機

ところでこの第3項としての向自有に二つの契機が区別される。すなわち第3項の後半 ( $A=A$ )

としての「無限な自己関係」と、前半 (B→A, C→A, …)としての「止揚された他有」である。前者が向自有に属する即自有であり、後者が向一有である。両契機は外的反省によって反省された向自有であり、両契機の統一が観念性をなしている。

### 観念性

観念性は無限性ないし向自有と同じものである。向自有が他有の止揚としての自己関係であったように、観念性の両契機は不可分の統一にある。

無限な自己関係としてすぐに思い浮かぶのが、自我、精神、神、絶対者であるが、通常はこれらが即自有であると同時に向一有であるというようには理解されていない。しかしヘーゲルはこれらにおいても即自有と向一有は同一であるとして、「神は向自的に有るが、それは神自身が神にとって有るところのもの(向一有：筆者)である限りにおいてである」と述べている。すなわちB→A, C→A, …という向一有が、A=Aという即自有と同一であることによって、即自有そのものが向一有になるということである。(A→B, A→C, …)

### 一の生成

観念性の両契機は外的反省にとっての区別に過ぎず、両契機は本来同一であることが明らかになることによって、観念性は自己内反省して向自有するもの、一となる。

先に無限性のプロセスの結果である第3項が無限性として捉えられることによって、直接性としての有が復活して向自有になると言った。ここでは第3項 (B→A, C→A, … : A=A)におけるA=Aのイコールの直接性がさらに徹底され、第3項の前半と後半、すなわち向自有の両契機である、向一有と即自有とが完全に一枚になる。(B=A, C=A, …を通じてA=A, A=A, …となり、完全なるA=Aが実現)かくして向自有は完全なる、自己との単一な一在ないし相等性を実現し、かかる直接性故に自己内有となって、向自有するものとなる。まったく区別を欠いた規定不可能な一 (A=A) として。

B 一

### 一と空虚

向自有がこのように一としていかなる他者にも関わっていないことに固執すれば、それはたちどころに無に関わっていることになり、他者が空虚として立ち現れることになる。その際一が有るものとなっているのに応じて、ちょうど古代の原子論においてそうであったように、空虚も有るものに劣らず有るものであり、かくして一と空虚はともに定有として対立しあうことになる。一方は有るものとしての純粹否定として、他方は非有としての純粹否定として。ここでは向自有の両契機である即自有と向一有が、定有を獲得して一と空虚になっていると考えることができる。

### 多くの一の成

それでも一が空虚において関わっているのは自分だけだとすれば、そこにすでに自分そのものが他者として立ち現れている。こうして一は多くの(この場合はさしあたり二つの)一への成である。

### 反撥

とはいえ一は一つの他者へ移行するのではないから、この運動は成ではなく、一は自分自身を自分から突き放すのである。一のこうした自分への否定的な関係が反撥である。

したがって一は反撥によって相変わらず自分に関わっているだけであるが、そうであるとする先んじた数多性は一には関わりのない、外的な規定だということになる。

### 相互的反撥

しかし一が自らをこのように主張することによって、一は自分の外を認めていることになる。こうして自分の外へ出てしまつて(我を見失つて)いるのである。自分の外とはこの場合、数多性のことであるから、一は数多性を自分自身から反撥していることになる。

このことをもう少し詳しく述べると次のようになる。そもそも一は自己へと関係する否定であり、これが本来の規定である。それが自己関係という点において固執・徹底されることによって直接性=有になってしまったのである。かかる有に対してはただちに非有が立ち現れる。換言すれば一は非有を自分から突き放したのである。突き放された非有は最初は無ないし空虚であったが、それ

が一と同じように一だということになって、今や一の絶対的他者になってしまっているのである。こうなると反撥は相互に行われることになる。すなわち $A=A$ が $A \neq A$ ないし $A=B, A=C, \dots$ となり、さらに $A$ もふくめ、 $B, C, \dots$ が独立的=向自的 ( $A=A, B=B, C=C, \dots$ ) になろうとするのである。

### 牽引の発生

とはいえ現状では多くの一が定有しているという状態にあるから、( $A=A$ に固執することで、否定せねばならない他有を本質として持つこと。 $A \neq A$ ないし $A=B, A=C, \dots$ ) 各々の一 (たとえば $A$ ) は相互に相手を排斥・否定しなければならない ( $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots$ ) ことになる。しかしそれはますます相手に関わって相手に振り回されることを意味している。かくして一は自らを逆に向一的に過ぎないものにまで貶めていくことになる。 ( $A \rightarrow B, A \rightarrow C, \dots$ ) しかし各々の一はこうした自らのあり方を反撥しているものであり、これが相互的に行われることによって、各々の一はこのような向一有にされているのである。

こうなると向自有における向一有 ( $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots$ ) のあり方は逆転して、他の一にとっての向一有、すなわちそれ自身は向他有になってしまっている。 ( $A \rightarrow B, A \rightarrow C, \dots$ ) そこで各々の一は相互反撥において他の一を単なる向一有に引き下げ、 ( $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots$ ) 同時に自らの向他有を止揚しようとする。

しかしこうなることで反撥は牽引へと移行してしまっている。なぜなら他者を向他有・向一有に引き下げ、(相手を自分の言いなりにしようとし) 自分の向他有を止揚すること (相手の言いなりにするまいとすること) は、まさしく牽引に他ならないからである。

このことはまた次のように表現できる。反撥によって突き放された一が絶対的他者であることによって、反撥する一はすでに向他有になっている。あるいはされてしまっている。そこで一はこの反撥を反撥する。この反撥の反撥が反撥の自己止揚として牽引なのである。

### C 牽引

#### 唯一の一

もちろんこのことは最初には自他の直接的な区別を前提し、観点の相違を設けることによって、両者の固有の有に固執する仕方ではなされる。すなわち一は、他の一の向自有を向他有に引き下げようとする。こうした試みによって、かえって一は自分自身を向他有に引き下げることになるが、一はこの自分の向他有を自分の中で止揚し、同時に他の一の向他有は自分の中に保持する、という仕方では自らの向自有としての即自有を実現するのである。その際、一の向他有は他の一のなかに保存されるが、そのことは当の一には何の関わりもないと考えるのである。こうして相互に相手を向他有に引き下げることが牽引であり、自らのうちで自らの向他有を止揚して即自有を保つことが反撥であることになるが、こうした牽引と反撥は自他の間で成立する二つの関係だということになる。それゆえそれらはそれぞれ相対的牽引と相対的反撥と呼ばれるのである。

しかしこうした自他の直接的な区別は現存していない。自分の向他有を自分のうちで止揚するということは他の一を向他有に引き下げることと一つであり、そうした他の向他有を自分のうちで保持するということは、とりもなおさず他の一そのものを向他有に引き下げてしまうことである。しかしこうした試みが相互に行われることによって、結局はかえって一は自らを向他有に引き下げ、他の一の向他有を再び止揚してしまわざるをえないのである。

目論見は①「一の無限な自己関係」 ( $A \rightarrow B, A \rightarrow C, \dots$ を止揚して $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots$ を通じての $A=A$ ) ( $B \rightarrow A, B \rightarrow C, \dots$ を止揚して $A \rightarrow B, C \rightarrow B, \dots$ を通じての $B=B$ )  $\dots$ であったが、今やそれが②「無限の自己外有」 ( $B \rightarrow A, C \rightarrow A, \dots$ を止揚して $A \rightarrow B, A \rightarrow C, \dots$ を通じての $A \neq A$ すなわち $A=B, A=C, \dots$ ) ( $A \rightarrow B, C \rightarrow B, \dots$ を止揚して $B \rightarrow A, B \rightarrow C, \dots$ を通じての $B \neq B$ すなわち $B=A, B=C, \dots$ )  $\dots$ に転じてしまっているのである。しかしそれが直ちに③「無限の自己内還帰」になる。なぜならここには一即多、多即一ないし one for all, all for one



の関係、あるいは西谷啓治のいわゆる「回互的關係」が成立しているからである。(A→B,A→C,・・・;B→A,B→C,・・・;C→A,C→B,・・・)が、(B→A,C→A,・・・;A→B,C→B,・・・;A→C,B→C,・・・)を通じて(A=A,B=B,C=C,・・・かつA=B,C,・・・;B=A,C,・・・;C=A,B,・・・)<sup>(2)</sup>Aは他のすべての一に対して自らを向他有に引き下げる。これが一即多(一切)ないしone for allの側面。しかしこうした引き下げを他のすべての一も行うことによって、他のすべてはAにとっての向他有となる。これが多(一切)即一ないしall for oneの側面。他のすべての一においても同様の事態が成立。向他有は向一有にまで徹底され、(B,C,・・・=A;A,C,・・・=B;・・・)さらに向自有としての即自有にまで純化される。(A=A,B=B,C=C,・・・)かくして一即多、多即一、一即一、多即多という仕方で数多性から自己内還帰した一が「唯一の一」である。

### 牽引と反撥との均衡

こうして定有から生成した一は自らを一として規定し、唯一の一(Ein Eins)となったわけであるが、この「唯一の一」は両義的である。第一に数多性を自分のうちに止揚している、多はまったく存在しない、という意味で「唯一」であり、第二にそれが徹底して直接性となることによって「ひとつの一」となって、多と関係し、したがって多くの一のひとつとなって多くの一を保持するような「ひとつ」である。

定有から生成したばかりの向自有は、まだ即自的に「止揚された他有」に過ぎない。それが向自的にも向自的となるために、これまでのプロセスが必要だったのである。それゆえ唯一の一は、一として規定された向自有の自己再生に他ならない。すなわちまず定有から生成したばかりの向自有は自己内反省して向自有するものとなり、自らを一として規定した。それは直接的な一として直ちに数多性へと出て行った。それは直接的な一が向自有から向他有に引き下げられたことを意味している。しかしそもそも向自有とは自己関係的な否定であるから、それが直接的な一となることで、すでに他者になってしまっているのである。この他者そのもの、すなわち「自体的に有る他者」は、

以前もそうであったように他者の他者として自らを止揚する。それは具体的には、直接的な一がその直接性をどこまでも徹底させることを通じて逆に自らを徹底的に向他有に引き下げることによって、換言すれば有限者がどこまでも有限者であることに徹することを通じて自らを減ぼすことによって、その究極の到達点が転換点となって回互的な関係が成立してくるということである。かくして自らにおける向他有を止揚した一が唯一の一である。

唯一の一においては多くの一が契機として保持されていること(A=A,B=B,C=C,・・・)と、それらが止揚されて一体となっていること(A=B=C=・・・)とが一つになっている。さしあたり前者は反撥、後者は牽引の側面を表すと考えられるから、牽引と反撥は唯一の一において均衡を保っていることになる。

### 牽引と反撥の同一性

しかしながら実際には牽引と反撥は同一のものである。第一に反撥とは相手を向他有として定立すること(俺に従え)であったが、これは牽引に他ならない。第二に逆に反撥とは自分の向他有を止揚すること(俺はお前の言いなりにはならんぞ)であったが、これもやはり牽引に他ならない。(俺の言うことを聞け)

さらに反撥が自分自身を反撥したように牽引も自分自身を牽引する。すなわち反撥が自己止揚を行ったように牽引も自己止揚を行うのである。かくて反撥の反撥は牽引であり、牽引とは牽引の牽引なのである。まず牽引は相手を向他有として定立することであったが、そのようにして生成した一が多くの一に関わり、それ自身多くの一のひとつになることによって、それ自身をも向他有にしてしまうのである。つまり牽引が自分自身を引っ張ることで、相手に引っ張られてしまうのである。(牽引の牽引=牽引の自己止揚の成立)また牽引が自分の向他有を止揚するという側面についていえば、俺はお前の言いなりにはならんぞ、という仕方で俺の言うことを聞け、と相手を引っ張ることは、相手に言うことを聞いてもらわなければならないという仕方で、またしても自らを向他有となし、自分の牽引を引きとどめ、牽引することで、相手に引っ張りまわされることになるのである。

(牽引の牽引=牽引の自己止揚の成立)

この反撥と牽引の同一性において成立しているのは、先に唯一の一の生成の際に述べたこと、すなわち一の自己自身への無限な関係を目論むことがかえって徹底的な、無限な自己外有だということである。しかしながらそれが回互的な関係によって無限の自己内還帰になるのである。

今や相対的な反撥と牽引は完全に同一となり、絶対的な反撥と牽引になる。ここに現存しているのは、一が自分自身に無限に関係するものとして、自分の絶対的な他有に関係し、また一がこの自分の非有に関係することによって、まさにこの点において自分自身に関係しているということである。

### 量への移行

唯一の一が絶対的な他有に関わるとは、直接的な一としての多くの一を契機として含むということ ( $A=A, B=B, C=C, \dots$ ) であり、自分自身に無限に関わるということは、( $A=B=C=\dots$ ) となって一体となっている自分自身と合体するということである。前者によって実在性は総体性に達し、唯一の一は絶対的に規定された有に、絶対的な質になっているが、それは同時に、後者との同一であることによって、 $A, B, C, \dots$  の連続性となり、このことによって質は超えられ、規定性 ( $A, B, C, \dots$ ) に無関心な統一になってしまう。かくしてまたしても直接性=有が復活するが、それは止揚された質として量である。

### 註

- 1 G.W.F.Hegel Gesammelte Werke 11 Felix Meiner S.290
- 2 西谷啓治『宗教とは何か』：『西谷啓治著作集』第十巻 創文社刊、百六十六頁